

私が目指す酪農教育 ～牛と人が紡ぐ未来～

農業科3年 中島 海

澄み渡った空の下、搾乳を終えた牛たちが一気に走り出す。大きな体で後ろ足をはねあげながら喜び、駆け回る。「ああ、牛ってやっぱりいいなあ」。一仕事を終え、ホッとした表情で若草を食べる牛たちに「いつもごくろうさん」今日も言葉をかけます。自然の中で見せてくれるその姿には、温かな命を感じます。牛は牛乳を生産する経済動物としての役割を担っています。しかし、それだけではなく、人間の心を癒し、食や命の大切さを教えてくれるのです。「牛が持つ本当の力」それを生かした「酪農教育ファーム」を経営する。これが私の夢です。

平成27年9月、宮城県石巻市立中里小学校で、酪農教育ファーム推進委員会主催の「モーモースクール」に本校の牛を連れて参加しました。今回は、乳牛とのふれあいをとおして、震災で被災した子どもたちの心の傷を癒すことが目標でした。真剣なまなざしで牛の乳を搾る子供たち。「牛乳でたあー、あったかい」弾けるような笑顔と歓喜の声。牛との触れ合いを通して、子どもたちの心を癒やすことができたのかもしれませんが。そして、バターづくり。力を込めて全身を縦横に振りながらでき上がったほんのわずかなバターを、子どもたちはためらうことなくそのまま口へ運びました。「おいしい！」輝きに満ち溢れた笑顔がとても印象的でした。バター作りは大成功。食と命の学びを支援する酪農教育ファームの可能性に希望を見出した瞬間でした。こうして、夢であったものが現実的な将来の計画に変わっていったのです。私は酪農家になるための経験を求め、仙台市泉区にある庄司牧場で宿泊研修を行いました。しかし、そこで直面したのは、思い描いていた酪農とは程遠い現実でした。牛の本来の寿命は15～20年と言われていいます。しかし、体験先のような集約型の酪農では寿命が6～7年と、牛たちは本来の命を全うすることができないのです。鉄骨で組まれた窮屈な牛舎、搾乳機器を着け、牛乳を絞られる牛たち。私はその姿を見て、胸が苦しくなりました。経済動物としての生涯と、命を大切にす教育との間に大きなジレンマが湧き上がり、酪農教育ファームをやるという夢に自信がなくなっていったのです。しかし、

そんな私に希望の光を授けてくれたのは、酪農家の岩本さんでした。「家畜は単なる農畜産物ではなく、感受性のある生き物、より幸福に生きるべきだよ。」私の心に強く響きました。快適性に配慮した家畜の飼養管理「アニマルウェルフェア」。そのことを学ぶきっかけになりました。牛が気持ちよい環境で暮らし、健康な姿を見せることで酪農教育の効果は高まるのではないかと。私は新たに進むべき道を見つけたのです。それは「山地酪農」。牛たちは365日、自生する野芝や雑草、木の葉をはみ、冬も雪上に暮らします。多様な草を食べる事によって本来の消化吸収のメカニズムを発揮し、日光の下で健康的に暮せるのです。

「牛も人も幸せにする」それが一番の魅力。そう語る山地酪農家の中洞さんに私は会いに行きました。岩手県岩泉。豊かな自然の中を生き生きとした牛たちがゆっくりと歩み寄り、私たちを出迎えてくれました。牧場の頂上から見渡す大絶景。30年かけて人と牛とで作った美しい山地に私は言葉を失いました。これは単なる風景ではない。牛をはじめとする一つひとつの息吹がはっきりと聞こえる幸せな世界。「これだ！」「私の目指す酪農教育ファーム」牛たちの気持ちが共感できる。子供達にもきっと感じてもらえる。牛たちの思いが伝わることで家畜へのいたわりが生まれ、それが感謝につながり、やがては命の尊さを実感することができるはずで。

私は将来、「山地の力」で、牛も人も心から健康に生きることができる酪農教育ファーム認証「中島牧場」を経営します。これまで行ってきた牛たちとのふれあいに加え、大自然の中で牛と人間がのびのびと暮らす姿そのものを、酪農教育の重要な教材にしたいのです。そして私は、酪農後継者や食と命について関心の高い人間を育て、幸せな社会づくりに貢献していきたい。家畜の命を頂くだけでなく、人間が牛の思いに気付き、その思いに応え、その恩恵の一部を人間が頂く。幸せな牛と人とが一本の糸を紡ぐ様に幸せな世界を作り出す。

「ああ、牛ってやっぱりいいなあ」子どもたちの中で、この言葉が飛び交う様に、これからも牛と共に歩いていきます。私が理想とする「牛と人とが紡ぐ未来」のために。